



幼児期の「夢中になる体験」が大切な理由とは…

園長 本多 郁代

運動会の種目の一つであった「箱積み上げ競争」は、運動会終了後も子どもたちに大人気の遊びとなっています。

年少組の子どもたちが、お兄さんお姉さんに混じって、見よう見まねで箱を積み上げたり、倒れないように抑えたりして遊ぶ姿が見られたり、年長組の子どもたちが巧技台を使いこなし最後は背伸びをして、遊戯室の天井に届くほど箱を高く積み上げたり、さらには年中組の子どもたちも一緒に箱を積んで大きな壁を作り、それを的にしてボールを当て箱を倒して遊ぶなど、遊びがどんどん変化（進化）していきました。これらは、それぞれの子どもが段ボール箱を使って夢中になって取り組み、遊び込んだ姿と言えるでしょう。



子どもたちはこれらの体験を通して、1つの箱の面の広さは必ずしも同じではないこと、箱を積み上げるには広い面のある大きな箱を選んで下の方に置くこと、小さな箱の上に大きな箱を積むと全体が不安定になることなど、多くのことを学んでいます。



最近幼稚園では、秋の自然物を使った遊びも盛んです。例えば、ムラサキシキブの実や葉を食材に見立ててスープを作ったり、ドングリを使ってコマ回しやコリントゲームを楽しんだり、一人一人が興味のある素材に触れ、秋を感じながら遊びに没入している姿が見られます。また、サツマイモを収穫した後に、いくつあるのか思わず数えなくなるワクワク感が消えないうちに、「1, 2, 3…」と、74まで大きな声で全集中して数を数えることにも挑戦しました。



このように、何かに夢中になる体験は、子どもの成長と発達において大きな役割を果たしています。夢中になれる何かを見つけることは、「情熱の発見」であり、子どもが自らの情熱を感じる第一歩です。また、何かに集中して取り組む過程で成功体験を積むことは、「やればできる」という信念を育て、物事に自信をもって取り組む基盤を作ります。さらに、体験を通して得られる楽しさや達成感は、その後の学習そのものへの動機付けにつながります。

私たちは、子どもが「夢中になる体験」を通して、自分の興味と能力を探究し、自信をもって新しいことに挑戦することができるよう、これからも環境を整え、適切な援助をしてまいります。

